近隣の社会経済状態と食事摂取量および body mass index との関連：18～20 歳の女子学生 3892 人の横断研究

村上健太郎[1]、佐々木敏[1]、大久保公美[2]、高橋佳子[3]、第 2 次栄養関連学科新入生調査研究グループ
（[1]東京大学、[2]女子栄養大学、[3]和洋女子大学）

私たちの生活は環境によって変化しうるものであるので、居住地域の特徴は、個々人の特性（たとえば喫煙や個人の社会経済状態）が与える影響とは別に、生活習慣（たとえば食事など）や健康状態（たとえば肥満など）に無視できない影響を与えるかもしれません。実際、いくつかの研究において、社会経済的に不利な地域に住んでいるひとは望ましくない食事摂取（たとえば果物・野菜の低摂取）や健康状態（たとえば肥満状態）におちいりがちである、ということが示されています。しかし、これらの研究はすべて欧米諸国で実施されたものであり、日本からもたらされた科学的知見は存在しないのが現状です。そこで、若年日本人女性のデータを用いて、近隣の社会経済状態と食事摂取量およびbody mass index（BMI）との関係を調べてみました。

調査に協力してもらったのは、全国47都道府県の1033市区町村に居住する、18～20歳の女子大学生3892人です。調査は2005年実施されました。過去1か月間に食べたものを詳しく尋ねる食習慣質問票（DHQ）を用いて、各種食品および栄養素摂取量を計算しました。

この研究では、自宅が存在する市区町村を近隣（neighborhood）と定義しました。おもに2005年国勢調査のデータをもとに、近隣の社会経済状態を把握するための尺度を開発しました。今回用いた近隣の特性は、失業者割合、平均住居面積、被生活保護世帯割合、大学・短大卒業者割合、平均収入、持ち家世帯割合、および単身高齢独居世帯割合の7つです。これらの特性のzスコアの合計得点を近隣の社会経済状態としました。得点が高いほど、その近隣は社会経済的に不利な特徴を持った地域である、ということを示します。

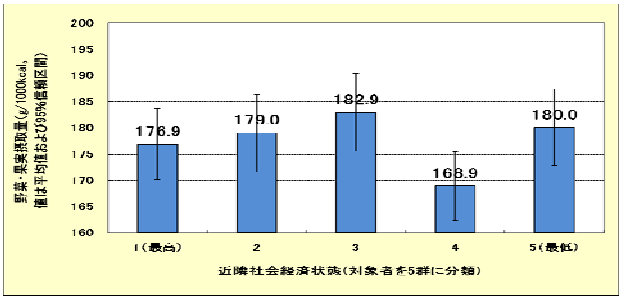
図1に示すように、今回の若年日本人女性においては、近隣の社会経済状態と野菜・果物摂取量とのあいだには有意な関連はみられず、これは欧米諸国の研究とは異なる結果でした。また、ここには示しませんが、検討したほとんどの食品および栄養素の摂取量において、近隣の社会経済状態との関連はみられませんでした。

一方、図2に示すように、考えられる交絡要因（地域、市区町村レベル、調査施設、居住形態、喫煙、飲酒、身体活動、エネルギー摂取量、食物繊維摂取量、および食事のグライセミック・ロード）で調整しても、社会経済的に不利な地域に住んでいるひとほどBMIが高い、という結果で、これは欧米の先行研究と同様の結果でした。

この分野における科学的知見は（特に日本において）まだまだ不足しているので、今後の研究が期待されます。

出典：Murakami K, Sasaki S, Okubo H, Takahashi Y, the Freshmen in Dietetic Courses Study II Group. Neighborhood socioeconomic status in relation to dietary intake and body mass index in female Japanese dietetic students. Nutrition (in press).

図1　近隣の社会経済状態と野菜・果実摂取量との関連：18～20歳の女子学生3892人の横断研究

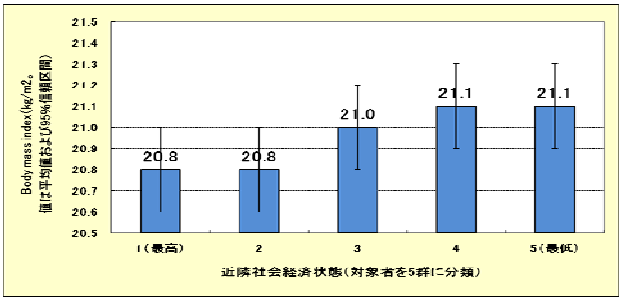


自宅が存在する市区町村のデータ（失業者割合、平均住居面積、被生活保護世帯割合、大学・短大卒業者割合、平均収入、持ち家世帯割合、単身高齢独居世帯割合）を用いて近隣の社会経済状態を評価。

傾向性のP=0.88。地域、市区町村レベル、調査施設、居住形態、喫煙、飲酒、および身体活動で調整した解析でも同様の結果が得られた。

Murakami et al. Nutrition (in press).

図2　近隣の社会経済状態とbody mass indexとの関連：18～20歳の女子学生3892人の横断研究



自宅が存在する市区町村のデータ（失業者割合、平均住居面積、被生活保護世帯割合、大学・短大卒業者割合、平均収入、持ち家世帯割合、単身高齢独居世帯割合）を用いて近隣の社会経済状態を評価。

傾向性のP=0.037。地域、市区町村レベル、調査施設、居住形態、喫煙、飲酒、身体活動、エネルギー摂取量、食物繊維摂取量、および食事のグライセミック・ロードで調整済み。

Murakami et al. Nutrition (in press).